



2014年5月16日

中央区長 矢田 美英 様

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 上浪 寛
同 保存問題委員会 委員長 安達 文宏
同 中央地域会 代表代理 山本 浩三



「三原橋センターの歴史と価値を未来へ伝えるための検討委員会」設置のお願い

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

中央区におかれましては、日頃より文化の発展と継承に深く理解を示され、心より敬意を表します。

さて、三原橋地下街及び観光館（以下「三原橋センター」）が解体工事に入るとの「お知らせ文」が、4月18日に張り出されました。

東銀座周辺には、かつて水運都市江戸の運河網の一つである三十間堀川が流れていました。三原橋は、その三十間堀川を跨ぐ橋の一つであり、晴海通りの橋梁として大正8年に都電の通行にも耐えられる鉄骨橋に掛け替えられました。その後の関東大震災や大戦の空襲にも耐えましたが、一方、三十間堀川は終戦後戦災で生じた瓦礫で埋め立てられました。都電の通る三原橋はそのまま残り、戦後のたくましい復興を象徴するように、昭和27年に橋梁の下部の空間を地下街として、翌昭和28年に晴海通りを挟んだ地下街の両端の地上部を店舗（観光案内所及び土産即売所）として、三原橋センターが建築されました。

設計は、土浦亀城によるものです。土浦は、東京帝国大学在学中から帝国ホテルの現場において巨匠フランク・ロイド・ライトの設計を手伝い、卒業後渡米しライトの下で学びました。帰国後はライトの造形言語に縛られない、モダニズムに位置づけられる合理的で明朗な建築を先駆的に設計しており、特に「土浦邸(第2)」(昭和10年)はモダニズム住宅の魁として広く知られております。三原橋センターは、かつての水運都市江戸の記憶を呼び起こす構造形態、戦後の市井の人々のたくましい復興を思い起こさせる成り立ち、土浦亀城の明るく清潔感のあるモダニズムのデザイン、通りを挟んで建つ双子ビルという特徴的な街並みへの寄与など、歴史的・文化的・都市景観的な価値において、たいへん貴重なものです。

その成立過程では戦後の混乱期における権利関係の錯綜があり、それゆえ公的資産として不適正な状態にあったとは存じますが、入居者の退去をもって権利関係が整理された後は、三原橋センターに潜在する文化的資産価値の位置づけに注力すべきと考えます。日本を代表する文化と商業のまち銀座において、江戸から現在の東京への歴史を伝える都市資産としてその利活用を図ることができれば、都市の成熟にとって最も望ましいことであると考えます。

地下街上部の橋梁の耐震性・耐久性を不安視する声もあると聞き及んでおりますが、関東大震災や戦災をも耐えてきた橋梁を十分に検証することは、今後の橋梁構造技術の発展のためにも非常に有用であると考えます。地下街のさらに下を通る東京メトロ日比谷線や地下倉庫も含め、専門家による正確な検証を行い、もし必要であればその補強方法も考案できると考えます。

様々な可能性の模索を経ていない今、直ちに解体してしまうのではなく、歴史・文化・都市・産業・土木・建築等の多岐にわたる価値を検証し、次の世代に伝えるための一つの試みとして、関係組織や専門家・学術団体が参加する、「三原橋センターの歴史と価値を未来へ伝えるための検討委員会」の設置などを、ぜひとも早急にご検討・ご対応いただきたく、ここにお願ひする次第です。

なお、公益社団法人 日本建築家協会 としましても、出来る限りの協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具